

母親に愛されず心に傷を負った少女の再生の軌跡を通し、児童虐待やいじめを見つめる朗読劇「ハッピーバースデー」が27日、川崎市多摩区の大森市民館で上演される。2007年に横浜市で初演されて以来、各地で大きな反響を呼び、5回目の公演となる。子どもが犠牲になる事件が相次いだ今年、原作者の一人、吉富多美さん(61)は「命の大切さを伝えたい」と語る。

(松島 佳子)

「あんななんか、産まなきゃよかった」。11歳の誕生日を迎えた少女に、母親は吐き捨てるように言った。少女は傷つき、声を失ってしまふ。物語の冒頭シーンだ。

「信じられない言葉。でも、懸け離れた世界の話ではないんです」。10年前、

伝えたい命の大切さ



「大切な人と作品を見に来てほしい」と話す吉富さん
—横浜市西区

虐待題材に朗読劇

27日、川崎

吉富さんがカウンセラーの勉強をしていたころ、ある親子に出会った。5歳前の娘が話さないことを相談に来た母親は、劇中と全く同じ言葉を言い放った。「ショックでした。存在を完全否定されるほどひどい虐待はないのに、お母さんにその意識はなかった」

カウンセリングに来る親子は少なくなかった。身体的、精神的暴力を受けるなど虐待の形はさまざまだが、どの子もその痛みを一人で抱え込んでいた。「子

「子どもの叫び知って」

どもたちの叫びを知ってほしい。小学校元校長の青木和雄さんとの共著で小説「ハッピーバースデー」(金の星社)を刊行した。

作品は150万部を超え、ベストセラーとなり、子どもたちが選ぶ「大人に薦める課題図書」にも選ばれた。驚いたのは、読者からの、共感の声だ。「自分の家族と重なった」「虐待を受けていたけれど、作品を見て救われた気がした」。自らと重ね合わせたのは大人だけではない。

物語の後半では、少女が通う小学校で起きたいじめをきっかけに、子どもたちが命や友達の大切さに気が付く。「自分の言葉が相手を傷つけているとは思わなかった」「僕のしたことはいじめでした」。本を読んだ児童からもまた、次々と声が寄せられた。

虐待事件や、いじめに悩んだ子どもの自殺は今年、県内を含め全国で相次いだ。「ショックなことが続いたからこそ、子どもたちに見てもらいたい」と

吉富さん。劇中、少女は語り掛ける。「いつだって、人は愛われる。そのために、学んでしょ」。吉富さんは「多くの人の心に、作品のメッセージが届けられたい」と話している。

公演は午後1時、5時の2回。料金3千円。問い合わせは、tvkチケットカウンター ☎0570(00)3117。